# 英語教育と文学的教材［16］†

## ―中高接続を踏まえた高校英語改善と工夫―

海老原万里子*・幡山　秀明**
栃木県立宇都宮東高等学校*
宇都宮大学教育学部**

中高の連携については、中学校と高校の学習指導における現状を把握し、中学校の学習内容の基礎・基本を補充しながら、高校の段階にスムーズに移行させることが大切である。４技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力育成に向け、中高の円滑な接続に基づいて高校英語授業の改善と工夫を行うためには、生徒の実態に応じて段階的に指導を行うとともに、学習内容を繰り返し指導して定着を図ることが重要である。本稿では、中高接続を踏まえた学習内容の定着と発信力育成に向けた指導の在り方について、第二言語習得研究に基づいた上で、学習者主体の言語活動が中心となる授業展開について考察する。

キーワード:　中高接続　新学習指導要領　第二言語習得研究　アウトプット活動　要約　リテリング　ディクトグロス

### １．研究設定の理由

平成２５年度から実施される高等学校新学習指導要領の外国語科の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり、適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」とある。高等学校においては、中学校における学習の基礎の上に「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の４技能を総合的に育成するための統合的な指導を行い、生徒のコミュニケーションを伸ばしていくことが大切である。

英語教育においては、コミュニカティブな言語活動を行っている中学校に比べ、高校では特に英語Ⅰ・Ⅱやリーディングの授業において、文法訳読式の授業が中心となっていることが多い。高校では学習内容の質も高く、量も増え、授業形式も異なることから、入門期において「中高ギャップ」に戸惑う生徒も多く、中高接続に向けて克服すべき課題も多いのが現状である。

中高の連携については、中学校の学習内容の基礎・基本を補充しながら、高校の段階にスムーズに移行させることが重要である。中高における学習内容や指導法の違いについて検証し、中学校から高校段階への円滑な接続を図り、学習内容の定着と発信力育成に向けた高校授業改善と工夫を行いたい。第二言語習得研究に基づき、中高接続を踏まえた効果的なアウトプット活動と教師のアプローチの仕方について、Learner-Centered の視点に立って考察し、その成果を学校現場で生かしたいと考え、研究主題を設定した。

### ２．研究内容

#### １　中高接続に向けて

#### １.１　中高の違い

#### １.１.１　生徒の生活状況、学習や社会に対する意識の違い

中高接続の課題を検討する上で、「中学校と高校における生徒の学習や社会に対する意識・教師の指導に関する違い」について下記の調査結果から現状把握をしておきたい。

† Mariko EBIHARA*, Hideaki HATAYAMA**: English Education & Literature as Teaching Materials [16]
* Utsunomiya Higashi High School
** Faculty of Education, Utsunomiya University

| | 項目 | | 中学校 | 高校 |
|---|---|---|---|---|
| 生徒 | 学習状況 | 通塾率（成績・高校偏差値層別） | **55.6%**（上位） | 28.1%（進学校） |
| | | 平日の家庭学習時間（成績・高校偏差値層別） | 65.4%（上位）<br>53.5%（中位）<br>**41.2%**（下位） | **88.5%**（進学校上位）<br>**75.8%**（中堅校上位）<br>30.8%（進路多様校上位） |
| | 授業中の様子 | ・授業中に居眠りをする<br>・近くの人とおしゃべりをする | 31.0%<br>**60.1%** | **69.5%**<br>45.4% |
| | 好きな授業形式 | ・先生が黒板を用いて教える授業<br>・パソコンを用いてする勉強<br>・友達と話し合いながら進める授業<br>・グループで考え、調べる授業 | 76.4%<br>**79.6%**<br>**73.5%**<br>**66.0%** | **82.9%**<br>52.3%<br>60.7%<br>48.9% |
| | 社会観や価値観 | いい友達がいると幸せになれる | 92.5% | 96.3% |
| 教師 | 授業時間の使い方 | ・教師主導の講義形式授業<br>・グループ活動を取り入れた授業 | 9.6%<br>**37.1%** | **32.5%**<br>8.6% |
| | 指導観 | ・教科書や指導要領を最後まで使う<br>・基本的な考え方の習得が中心 | **70.8%**<br>29.2% | 30.6%<br>**69.4%** |
| | 指導力向上の取り組み | ・校内で教材・授業研究をする<br>・先輩・他教員からアドバイスをもらう | 87.1%<br>**72.9%** | 80.1%<br>61.7% |
| | 教師の魅力 | ・生徒と喜怒哀楽をともにできる<br>・教科の専門知識・自己経験を生かせる<br>・生徒の成長に関われる | **93.1%**<br>83.9%<br>85.4% | 85.0%<br>**87.6%**<br>84.1% |
| | 指導の悩み | 小学校/義務教育段階までの学習内容の定着が低い | **80.9%** | 43.0%(A)*<br>72.2%(B)*<br>**91.7%(C)*** |
| | | 生徒の学習意欲が低い | **73.2%** | 49.2%(A)<br>76.6%(B)<br>**92.9%(C)** |
| | | 生徒間の学力差が大きく、授業がしにくい | **71.0%** | 45.5%(A)<br>57.6%(B)<br>**74.9%(C)** |

*(A) 生徒の中学校時評定平均4.5～5.0点 (B) 同評定平均3.5～4.0点 (C) 同評定平均3.0点 (Benesse 教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」2006年、「第4・5回学習基本調査」2009年と2010年より抜粋)

この調査結果によると、学習状況については通塾率は中学生の方が高い。平均家庭学習時間は高校の方が成績や偏差値で差が大きい。また、中学生の方が主体的な学習スタイルを好む傾向にある。社会観や価値観においては、友達の大切さは共通であることが分かる。

### 1.1.2　教師の意識や指導に関する違い

中学校では、グループ活動等を通して生徒が主体的に学習に参加する授業を心掛けているのに対し、高校では「教師主導の講義形式の授業」が多い。教師の魅力については、生徒の成長に関わり、社会を担う人材育成に貢献できること等が共通した魅力となっている。

## 1.2　違いを踏まえた中高接続の在り方

（1）中学校と高校が各段階での「自立」と「個性」の形を追求する（安彦、2009）。

①「自立」：中学校は「基礎作りの時期」、高校は「準備の時期」

②「個性」：中学校は「探る時期」、高校では「伸ばす時期」

（2）中学校までの学習歴を踏まえ、中高での教科指導の段差をなくす。

①中高間の授業見学を通して、学習内容・指導法を学び合う。

②「習得・活用・探究」の観点を繋げる。

③「学びの共同体」導入により、学び合う授業への転換を図る。

（1）（2）について、所属校の教育内容と関連付けて考察していきたいと思う。

宇都宮東高等学校・同附属中学校においては、下に示したとおりに6年間の学習ステージを3段階に分け、キャリア教育を行っている。

| | | |
|---|---|---|
| 高3年<br>高2年 | 発展期 | 個性・適性・実行力をさらに伸ばす |
| 高1年<br>中3年 | 充実期 | 自己を見つめ、向上の手だてをつかむ |
| 中2年<br>中1年 | 基礎期 | 学習や生活の基盤を作る |

キャリア教育における「充実期」の役割は次のとおりである。

1）学習に主体的に取り組み、学習習慣の定着化を図り、幅広い学力を身に付ける。

2）自己の個性や適性について理解を深めるとともに学問領域と職業との関係について理解を深め、

適切な類型（文型・理型）選択を行う。

3）問題解決学習や探究活動に積極的に取り組み、論理的に物事を考え、表現する力を身に付ける。

4）様々な集団による活動を通してリーダーシップ、フォロアーシップを発揮する力を身に付ける。

5）様々な観点から自己と社会との関係を考え、社会の一員としての自覚を深めるとともに、自己の在り方や生き方について深く考える。

（1）について、安彦(2009)によると、①「自立」については、中学校が「基礎作りの時期」、高校では専門教育への「準備」とともに幅広い知識と経験の時期であり、②「個性」においては中学校が自分の適性や興味・関心を「探る時期」、高校ではそれを「伸ばす時期」であると述べている。所属校においても、基礎期では学習と生活の基盤を作り、充実期においては自己理解の深化と学習内容の定着を図り、発展期で個性や適性を伸ばし、自立に向けて準備する、という点で（1）と共通している。

（2）については、中学校までの学習歴を踏まえ、中高での教科指導の段差をなくし、中高が連携して生徒を育てていくという視点を持つことによって、学びの連続性を高めることができる。

①については、中学校と高校の教師が互いに授業を見学し合い、授業方法の特徴を認識し、学習内容や指導法について学び合い、話し合うことが大切である。所属校においても、「授業第一」主義に基づき、年1回の中高授業公開期間（2週間）における授業研究を行うとともに、週1回の各教科の打ち合わせ等を通して各校種の学習内容と指導体制・各種テストの結果分析・生徒の実態等について話し合い、情報の共有を行い、教科指導の充実を図っている。

②については、高校では学習内容の量や難易度がアップし、1.1の調査結果のように、講義形式の授業という学習形式や家庭学習への比重の大きさによる学習法の変化に対応しきれず、学力差が大きくなり、学習意欲を失ってしまう生徒も多い。新指導要領にも明記されている「基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得」と「それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力を育む」ことについては、習得と探究の両輪が大切であることを示している。新課程で言語活動の充実が重視されていることを踏まえ、高校においてもグループ活動を取り入れ、活用の場面を設けることも効果的である。これによって参加意識が生まれ、コミュニケーションが促進されるとともに、グループ活動で他者に分かるように説明することによって理解確認に繋がるのである。授業の効果を高めるためには、家庭で学習したことを確認する時間を授業で設け、学習内容の定着を図ることが大切である。家庭学習についても学習方法を具体的に指示することが効果的である。「習得・活用・探究」の観点を持つことによって、中高ギャップを埋め、生徒の自律的な学習を促すことに繋がるのである（市田、2011）。

③については、近年、高校においても「学びの共同体」の導入が注目されている。東京大学教育学部附属中等教育学校では、2005年度から同大学大学院教育学研究科の佐藤学教授が提唱した「学びの共同体」による学校づくり、授業づくりに取り組んでいる。「学びの共同体」は、学校を学び合いの場にし、生徒一人ひとりの学ぶ権利を実現する授業実践である。生徒同士の学び合いを通して自己の認識を整理し、多様な考えに接することによって学習意欲や学力向上をねらいとしている。

共同学習の機能については、次の4点を挙げている。

○説明や質問を言語化することで不明瞭な点が明らかになり、より理解が深まる（理解進化）。
○集団全体としてより豊かな知識ベースを持つことができるため、限られた時間内に思考が節約でき、アクセス可能、利用可能な地域が増える。
○相手の反応等によって、自己の認知過程や思考のモニタリング（評価調整）ができる。
○相手とやりとりをし、同じ意見や活動を共有することで、参加への動機やグループ意識が高まる。

（東京大学教育学部附属中等教育学校公開研究会資料）

「学びの共同体」は従来の授業スタイルとは大きく異なる。原則として、各教科とも全ての生徒が壁に背を向けて「コの字型」に座り、必要に応じて4人1組のグループを作って課題や討議に取り組む。コの字とグループとを切り替えるタイミング、生徒の主体的な参加を促す声かけや課題など、生徒が学びあえる雰囲気を作れるかどうかが教師にとって重要になる。この形式を学校全体で導入するに当たっては、体制の確立において課題も多いが、上記のような共同学習が目指す方向性や機能を理解し、自校の生徒の特徴を把握した上で、重点を置くべき教育活動を見定め、学びの主体性を高めることができるといえよう（ベネッセ、2009）。

### 1.3　教科指導における中高接続の在り方

高校３年間の指導を計画的に行うためには、第一に、生徒の現状理解度、つまり「出発点」を把握して生徒が何を出来るようになるかという「到達点」を明確に意識することが重要である（久保野、2009）。第二に、生徒の学習履歴を把握して中高ギャップをなくし、円滑な接続に向けた指導への準備が出来る。第三に、既習事項のスパイラルな指導で学習内容の定着を図ることができる。また、英語教育と共同学習との関連性は深く、新課程で示されているようにペアワークやグループ活動を取り入れることでコミュニケーション能力育成を推進し、学習形式についても中高における学びの連続性を高めて円滑な移行を図ることができる。

## 2　新学習指導要領

### 2.1　中学校の新指導要領改訂のポイント

（1）授業時間数が各学年ともに「年間 105 時間」から「140 時間」に増加した。

（2）指導語数についても「900 語まで」から「1,200 語程度」に増加した。

（3）「はどめ規定」を廃止した（「理解の段階にとどめること」などの記述を削除・改訂）。

### 2.2　高等学校新指導要領改訂のポイント

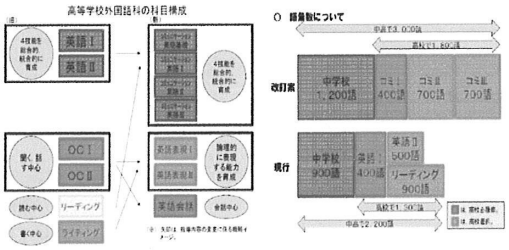
（1）四領域の言語活動の統合を図るとともに、発信力の向上や、中学校との円滑な接続を図る観点から、科目の構成及び内容を改善した。科目構成は「コミュニケーション科目」、「表現科目」、「英語会話」に再編した(図１)。

（2）指導する語数を充実し、高等学校で 1,800 語、中高で 3,000 語に増加した(図２)。

（3）文法は、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、文法指導を言語活動と関連付けて指導する。

（4）生徒が英語に触れる機会を充実させ、授業は英語で行うことを基本とすること。

(図１)　　(図２)　(文部科学省 HP)




## 3　第二言語習得研究

### 3.1　第二言語習得研究の変遷

言語習得の本質については、「インプット仮説(Input Hypothesis)」と「自動化理論(Automatization Theory)」という２つの主要な考え方がある。「インプット仮説」は「インプット（聞くこと、読むこと）により言語習得は起こる」という考え方で、Krashen が提案したものである。それに対して、「自動化理論」は最初に明示的知識を身に付け、それを練習することによって徐々に自動的に使えるようにするという考え方である（白井、2012）。

### 3.2　第二言語習得の認知プロセスを活性化する英語指導

第二言語の認知プロセスにおいて最も重要なのは言語形式ではなく、意味内容、題材内容に中心を置く第二言語指導であり、「内容中心第二言語教授法(Content-based L2 Instruction)」と呼ばれ、近年注目されている。(Brinton Snow & Wesche, 1989)。教科書を用いた内容中心の指導は、提示(Presentation)、理解(Comprehension)、練習(Practice)、産出(Production)の PCPP の流れで行うことによって、従来の英語指導法を抜本的に変更せずに実施することが可能である。そして、それは第二言語習得の認知プロセスに効果的に働きかけると予測できる（村野井、2006）。

### 3.3　アウトプットの機能

アウトプット仮説によると、第二言語学習者が話したり、書いたりすることは、次の点で重要である（村野井、2006）。

（1）自分の第二言語習得の「穴」に気付く

（2）目標言語と中間言語のギャップに気付く

（3）理解可能なアウトプットを産出する

（4）仮説検証の機会が生まれる

（5）統語処理・文法意識化が促される

（6）言語知識の自動化が進む

Krashen らが主張する「理解可能なインプット(Comprehensible Input)」が習得の必要条件であることを踏まえた上で、インプットがより効率よく言語習得に繋がるようにアウトプットを適切に学習過程に組み入れるという考え方が重要である。

## 4　中高接続を踏まえた授業改善と工夫

### 4．1学習内容の定着と発信力育成に向けた指導

上記についての考察や検証に基づき、中学校から高校への円滑な移行を踏まえた授業を行うためには、学習内容の定着と発信力育成に向けたアウトプット活動を行うことが効果的であると考えた。具体的な手立てとして次の３つの活動がある（田村、2011）。

1）４技能が相互に活用された活動
2）既習の複数の文構造を用いる活動
3）語彙・文法の使用・習得が反復的に図れる活動

次に、これらを踏まえたアウトプット活動である「要約」、「ディクトグロス・コピーグロス」、「ストーリー・リテリング」の指導法について説明していく。

#### 4．1．1　要約（Summarizing）

要約とは、読んだり聞いたりした内容を自分の英語で要約する学習法である。誘導要約法は自立要約法とは異なり、教師がテキストの概要を表したコンセプト・マップを作成して、学習者にどのような要約を書かせるか、ある程度誘導するものである。リーディングを中心とした授業の一環として行う読後活動として効果的である。（村野井、2006）

（1）主題把握の活動･･･タイトル作成、センテンス・サマリー・タスク
（2）空所補充型の活動･･･語補充、文補充
（3）自由英作文型の活動･･･アウトラインを活用した要約、異なる視点を持った要約、多読サマリータスク

#### 4．1．2　ディクトグロスとコピーグロス

（1）ディクトグロス（Dictogloss）

比較的短く、内容の濃いまとまった文章を、教師が普通のスピードで数回読み、学習者はメモを取りながら聞く。聞き取ったことを基に、ペアやグループで協力してテキストを復元していく活動である（Kowa l& Swain, 1994; Swain, 1998）。

（2）コピーグロス（Copygloss）

ある程度まとまった量のディクトグロスをベースとし、聴く代わりに速読を行ってテキストを見ずに概要をまとめる活動である。（永末 2012）

#### 4．1．3　ストーリー・リテリング（Story Retelling）

ストーリーを読んだ後に、知らない人に原稿を見ない状態でそのストーリーの内容を語る活動で、日常生活の中で頻繁に行われている。読解後のストーリー・リテリングは、生徒の理解度の診断に活用したり、読解力に必要なスキルの向上に役立てたり、４技能を統合した活動に結び付けやすく、生徒主体の活動である等、多くの利点を持つ活動である（卯城、2009）。

（1）インフォメーション・ギャップを活用した導入･･･単語レベル・フレーズ/文・文章レベルでの再話
（2）クリエイティブ再話･･･対話から物語への再話、ドラマを用いた再話
（3）ジグソー再話

### 4．2　授業実践例

研修中に学校訪問や公開研究会、研修会等において、中高の授業観察をする機会を得た。その中から中学校における「ストーリー・リテリング」と、高校における「要約」、「ディクトグロス」、「ストーリー・リテリング」のアウトプット活動に焦点を充て、学習内容の定着と発信力の育成に向けた指導の在り方について考察するとともに、中高接続を踏まえた授業展開を提示していきたい。

#### 4．2．1　中学校

（1）Consolidation におけるリテリング

○東京都東村山市立東村山第二中学校
・クラス　２－２（３９名）
・教科書　*NEW CROWN SERIES 2*（三省堂）
　Lesson 8 “Landmine and Children” Part 3
・指導手順

1) Greeting
2) Warm-up
　[Q&A in pairs]
3) Review
　[Q&A→Chorus Reading→Pair Reading ]
4) <u>Story Retelling</u>
　[Model→Practice→Presentation]
5) Consolidation
　[Quiz→Writing]

＜指導のポイント＞

絵や写真の入ったシート(印刷された質問に答える形式) を配布し、それを説明するための会話をペアで作り、暗記して発表するという Production 活動を行っている。今後はさらに、自分の言葉で説明できるように指導していきたいとのことであった。

（2）Review におけるリテリング

○宇都宮大学教育学部附属中学校

・学年　　第３学年

・教科書　*SUNSHINE COURSE 3*（開隆堂）

Lesson 4　"A Red Ribbon" Part 4

・指導手順

1) Sing a Song

2) Review

[Reading Aloud→Story Retelling→Dictation]

3) Presentation of New Material

[Oral Introduction → T-F → New words → Reading Aloud→Q&A ]

4) Consolidation

＜指導のポイント＞

Review として、黒板の絵やキーワードを見ながらリテリングを行っている。生徒の学習状況に応じて様々な活動を提供し、段階的指導を行いつつ進めている。中高接続を踏まえ辞書指導も行っている。

（3）Review（帯活動）におけるリテリング

○神奈川県横浜市立富士見中学校

・学年　　第３学年

・教科書　*NEW HORIZON Course 1*（東京書籍）

Unit 10 "Niagara Falls"

・指導手順

帯活動を授業の始めに各 10 分実施

1時間目　[1st Reading]

（まず本文を読む「懐かしい」）

[Retelling 1]（ペアでまず話してみる）

2時間目　[First Presentation]

（グループで伝え合う→全体で発表）

[Focus on Form]

（使いたい表現・文法を復習）

3時間目　[ALT's Corner]

(ALT のモデルを読む「これ使える」)

話す内容を再検討

4時間目　[Retelling 2]（ペアで）

[2nd Presentation]

[Focus on Form]

（使いたい表現・文法を復習）

5時間目　[2nd Reading and Research]

（もう一度読む）

6時間目　[Final Presentation]

・写真見ながら発表、原稿なし

・Q や自分の意見も入れる

・T がサポート（相づち、繰り返し）

・発表後 T-S s で Q&A

＜指導のポイント＞

１・２年前の教科書本文を用いたリテリングは、理解しやすく、アウトプットへの余裕が生まれるとともに、既習事項を使う機会が増え、スパイラルな指導ができる。ここでは、会話文から物語文へのクリエイティブ再話を行っている。教師は常に Referential Question や Interaction をする機会を狙っている。授業で様々な活動を提供し、バランスを取ることが必要である。

（4）Final Presentation におけるリテリング

○千代田区立九段中等教育学校

・学年　　第３学年（１８名）

・教科書　*NEW HORIZON Course 3*（東京書籍）

Let's Read ②　"Family rules"

・指導手順

1) Sing a Song

2) Overwrapping Using Worksheet

3) Story Retelling

[Repeating → Practice in pairs / individually→Presentation in pairs→ Final Presentation]

4) Consolidation

＜指導のポイント＞

「発表は４分以内、自分自身の意見や経験を含めること」「アイ・コンタクトを心掛け、発音に注意すること」の２点を予め生徒に伝えておき、評価を行う。授業での練習や家庭学習の際に使うワークシートは４段階あり、「副詞」→「副詞と形容詞」→「副詞・形容詞・動詞」→「ほとんどの語」を伴って再現ができるように空所補充の形式で作られている。活動においては、既習事項の定着と発信力の育成に向けて段階的かつ反復的な指導がなされている。中学３年の内容であり、高校１年次入門期の授業において、帯活動で実施することによって、中高の円滑な接続ができると思われる。

4.2.2　高等学校

（1）Consolidationにおけるリテリング

○筑波大学附属高等学校

・クラス　　1－4（40名）　英語Ⅰ

・教科書　*Genius English Course Ⅰ*（大修館）

Lesson 8 "Ant Communication" Part 2

・指導手順

1) Greeting

2) Review [Reading aloud]

3) Presentation of New Material

[Oral Introduction → Explanation → Reading aloud→Structure Drill]

4) Summarized Text Retelling

＜指導のポイント＞

インプットの内容を、写真や絵、語句を利用して学習者が英語で再現する。このようにして記憶力の負担を軽くすることによって、英語でのアウトプットという負荷の高い作業も可能となる。

（2）Oral Introduction後・Consolidationにおけるリテリング

○お茶の水女子大学附属高等学校

・学年　　第2学年　英語Ⅱ

・教科書　*Prominence English Ⅱ*（東京書籍）

Lesson 1 "*Mottainai*" Part 1

・指導手順（45分×2時間授業形式の場合）

1) Presentation of New Material

[Oral Introduction → Q&A in pairs → Retelling in pairs]

2) Reading and Comprehension

[Silent Reading for Comprehension → Explanation→New Words→CD Listening →Reading Aloud]

3) Retelling

4) Summary Writing

＜指導のポイント＞

1)のOral Introduction後、ペアでQ&Aを行い、すぐにペアでのリテリングを行っている。これによって、Oral Introductionを集中して聞くことができる。導入後の発表なので、全ての内容を完璧に説明する必要はないと思われる。最後のリテリングはより深い学習内容の理解と定着を図る目的で行われている。

（3）要約

①栃木県立栃木高等学校

・クラス　2－5（文系　40名）　英語Ⅱ

・教科書　*Crown English Reading*（三省堂）

Lesson 11 "Plenty of Room at the Bottom"

・指導手順

1) Review

[Phrase Reading→Summarizing paragraph in Japanese→Summarizing paragraph in English→Shadowing]

2) Presentation of New Material

[CD Listening →Listening Questions →New Words→Reading Aloud→Q&A]

3) Review

[Finding main ideas of paragraphs by summarizing them]

4) Consolidation　[Check Assignment]

＜指導のポイント＞

各パートを2時間ずつ配当し、内容理解と要約活動に分けて授業を行っている。ワークシートは使わず、板書を通して進めている。1)のPhrase Readingの際は、教科書を見ずに行っており、Listeningも含まれる。その後生徒は日本語、英語の順に要約活動を行う。ペア活動が入ればディクトグロスの一環であると言えよう。生徒の要約発表や、Q&Aの際には、教師がキーワードを板書していき、それを繋げると次時のReviewで要約ができる。キーワードについては、Content Wordsを中心に板書され、概要や要点把握力を図っている。

②東京学芸大学附属高等学校

・クラス　2－A　　英語Ⅱ

・教科書　*Element English Course*（啓林館）

Lesson 8 "What Happened to a Local Village" Part 2

・指導手順

1)Review

[Practice→ Pair Work→ Presentation→ Written Work]

2) Introduction of Part 2

[CD Listening ( Part 2 ) (Twice) → Completing the SUMMARY Sheet→Checking→Reading Aloud (Twice)]

3) Comprehension (Textbook)

[CD Listening → Q&A / T-F → Listening → Explanation ( Check of Understanding ) →CD Listening →Reading Aloud (Twice)]

4) Comprehension (Paraphrase)
[Silent Reading× 2 (Slash + Underline)→ Reading Aloud (Model)]
5) Recitation (Part 2 のSUMMARY Practice)
＜指導のポイント＞
Summary と Paraphrase の音読・暗唱・発表と、Written Work がスムーズに行われ、明確な到達目標を踏まえた上で、継続的に活動している様子が見られた。

## 5．研究の成果と今後の課題

今回の研修で、中高の円滑な接続を踏まえた高校英語授業の指導の在り方について、中高の現状把握や新学習指導要領、第二言語習得研究に基づいて研究を行った。4技能の統合や学習内容の定着、発信力育成に効果的なストーリー・リテリング、ディクトグロス、要約等のアウトプット活動を取り入れ、教科書を中心に据えた授業改善と工夫を行うことによって、中学校から高校へのスムーズな移行が図れることがわかった。活動においては、生徒の実態に応じて段階的に指導を行うとともに、スパイラルな言語活動の継続的な展開が必要である。今後も英語教員として各段階に応じた相応しい指導力を身に付けるために研鑽を積み、学習者である生徒の学びの視点に立った授業展開を目指していきたい。

## 参考文献・資料


浅見道明（編）(2011)『ELEC 夏期英語教育研修会資料』英語教育協議会
卯城祐司（編）(2011)『英語を英語で読む授業』研究社
宇都宮大学教育学部附属中学校(編)(2011 )第 56 回宇都宮大学附属中学校公開研究発表会資料
金谷憲（編）(2009)『教科書だけで大学入試は突破できる』大修館書店
金谷憲（編）(2011)『高校英語授業を変える！』アルク
小菅和也他（編）(2008)『語研ブックレット２』語学教育研究所
白井恭弘 (2012)『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店
白井恭弘 (2008)『外国語学習の科学』 岩波新書
鈴木一行（編）(2007)『英語教育』2007 年 5 月号大修館書店
鈴木一行（編）(2009) 『英語教育』2009 年 5 月号大修館書店
谷口弘美（編）(2011)「語学研修所主催 特別講座資料」語学研修所
筑波大学附属高等学校（編）(2011) 「第 61 回筑波大学附属高等学校研究大会資料」
東京学芸大学附属高等学校(編)(2011)「第 10 回東京学芸大学附属高等学校公開教育研究大会資料」
東京大学教育学部附属中等教育学校（編）(2012)「第 13 回東京大学教育学部附属中等教育学校公開研究会資料」
長沼君主・永末温子（編）(2011)「ELEC 同友会英語教育学会第 17 回研究大会シンポジウム：香住丘高等学校における実践から見る Can-Do リスト及びタスク開発」英語教育協議会
長沼君主他（編）(2009)「Can-Do 評価－学習タスクに基づくモジュール型シラバス構築の試み」『東京外国語大学論集』第 79 号
原 茂（編）(2011) *VIEW21* 6 月号 Benesse 教育研究開発センター
原 茂（編）(2011) *VIEW21* 9 月号 Benesse 教育研究開発センター
松村昌紀 (2009)『英語教育を知る５８の鍵』大修館書店
村野井仁(2006)『第二言語習得研究から見た効果的な学習法・指導法』大修館
文部科学省(編) (2010) 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』開隆堂
文部科学省(編) (2009)『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂
文部科学省（編）「高等学校学習指導要領関連資料」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/081223/014.pdf


**（本稿の実質的著者は海老原万里子教諭です）**